

須玉町埋蔵文化財報告

第4集

津金御所前遺跡

圃場整備事業に伴う山梨県北巨摩郡須玉町下津金
津金御所前遺跡昭和56年度第1次発掘調査概報

1987

須玉町教育委員会

蟠面把手竹筒杯（出樊文土窖）



大鸟纹把手竹筒杯（水坡形土窖）



序 文

昭和25年、我々の祖先が残した文化遺産が、開発によって破壊され失われていくことから保護し保存する目的で、埋蔵文化財保護法が施行されて以来、我が須玉町では始めての圃場整備事業に伴う発掘調査が、津金御所前で行われました。

本概報は、昭和56年9月16日に始まり、11月3日に完了した『津金御所前遺跡』の調査報告書の概報であります。

津金御所前遺跡が発見された津金の地は、県内屈指の遺跡包蔵地であると共に、戦国時代に辺境武士団として活躍した津金衆のふる里という歴史的包蔵地でもあります。

特に縄文時代の遺跡の密度は大変濃く残されており、御所前遺跡第二次、桑原遺跡、桑原南遺跡、原の前遺跡等が次々に発掘調査されました。これらの遺跡の規模や内容から、人泉村の金生遺跡、高根町の石堂遺跡とほぼ同じ標高にある相の原台地に、それらに匹敵する一大集落が未だ深い歴史の中で眠っていることが考えられます。更に下って、平安時代の遺構の数々も同時に検出されております。

御所前遺跡3号住居址から出土した渦巻文（大渦文）把手付深鉢は、造形美の頂点に立つ縄文時代中期のもので、華麗な彫塑的装飾は長野県富士見町曾利遺跡から出土した同型の深鉢に勝るとも劣らぬ逸品です。昭和61年の秋、国立東京博物館主催の「日本の陶磁」特別展に出品展示されたことは既に御承知の通りであります。

5号住居址から出土した顔面把手付深鉢の、浮彫状に装飾された把手部の顔面は、慈母の顔であり胸部の顔は生まれくる童子のそれであります。お産土器とも呼ばれます。この深鉢から縄文人の豊かな生命力を覚え、縄文人の牛の讃歌が聽こえるような気がいたします。

これら数々の貴重な出土遺物を永久保存すると共に、教育的分野、公共的分野等、広く内外に活用されることを期待します。

なお発掘調査にあたり、県文化課の御指導や復元に御協力いただいた井戸尻考古館の武藤雄六氏、直接発掘調査の作業にあたられた地元の皆様方に対しまして深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和62年3月31日

須玉町教育委員会

教育長 坂本 劍一

例　　言

- 1 本報告書は、県宮園場整備事業に伴う「津金御所前遺跡」の埋蔵文化財発掘調査概報である。
- 2 遺跡は、山梨県北巨摩郡須玉町下津金字御所前3022番地に所在し、昭和56年5月25日から6月7日にかけて調査員山下孝司、渡辺儀訓氏の試掘調査に基づいた本調査である。
- 3 本調査は、町費157.5万円のほか、文化財保存事業として県費52.5万円の補助金を受け須玉町教育委員会が実施した。発掘調査は昭和56年9月16日より同年11月3日までに実施した。
- 4 本概報は山路、深沢が執筆した。大渦文把手付深鉢と、顔面把手付深鉢の復元は、井戸尻考古館館長の武藤雄六氏の御協力をいただいた。
- 5 本調査における図面、写真、出土遺物は須玉町教育委員会が保管している。
- 6 発掘調査組織（昭和56年時）

調査主体……須玉町教育委員会 教育長 磯村 茂

調査担当者…須玉町教育委員会 文化財調査員 山路恭之助

補助調査員 山秋 泰、深沢裕三

- 7 発掘調査事務局（昭和56年時）

須玉町教育委員会 教育課長 舞水忠亀（現助役）

社会教育係長 藤原源義（現教育課長）

社会教育係 藤原良一（現社会教育係長）

- 8 発掘調査及び整理作業参加者（順序不同、敬称略）

津金昭二、早川よしえ、津金きみよ、津金豊子、津金みよじ、津金幸子、早川八重子
早川令子、早川梅次、志水かのえ、清水すみ子

- 9 調査協力機関及び個人（順序不同、敬称略）

県文化課、津金区、町経済課

（個人）武藤雄六、末木 健、新津 健、八巻与志夫、米田明訓、山下孝司、渡辺儀
訓、佐野勝広、雨宮正樹、中山千恵（旧姓日向）

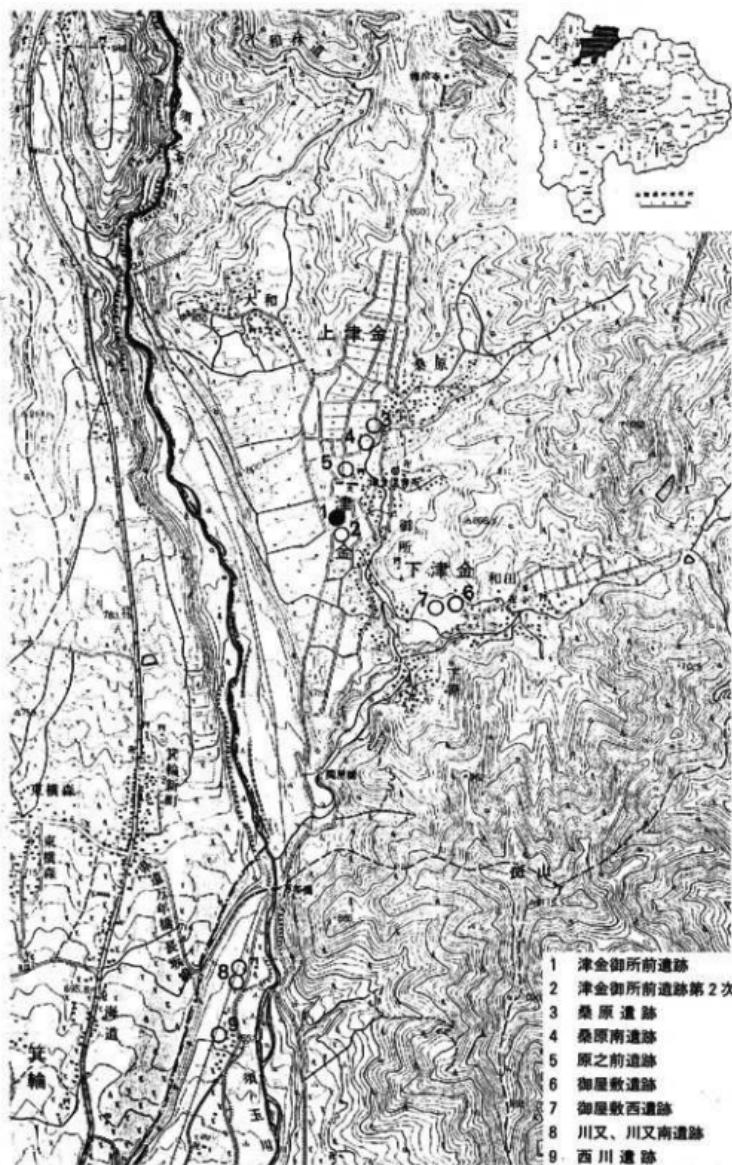
目 次

本 文 目 次

| | |
|-------------------|----|
| I 調査に至るまでの経過..... | 2 |
| II 遺跡の立地と環境..... | 2 |
| III 調査の実施..... | 3 |
| IV 遺 構..... | 4 |
| 3号住居址..... | 6 |
| 4号住居址..... | 7 |
| 5号住居址..... | 8 |
| 6号住居址..... | 9 |
| 7号住居址..... | 9 |
| 土 壤 群..... | 9 |
| V 遺 物..... | 11 |
| VII ま と め..... | 12 |

挿 図 目 次

| | |
|-------------------------|----|
| 第1図 御所前遺跡と周辺の遺跡位置図..... | 1 |
| 第2図 遺跡全体図..... | 5 |
| 第3図 遺跡配置図..... | 5 |
| 第4図 3号住居址遺構図..... | 6 |
| 第5図 4号住居址遺構図..... | 7 |
| 第6図 5号住居址遺構図..... | 8 |
| 第7図 6号住居址遺構図..... | 9 |
| 第8図 7号住居址及び土壤群..... | 10 |
| 第9図 遺物実測図..... | 12 |



第1図 御所前遺跡と周辺の遺跡位置図

I 調査に至るまでの経過

昭和56年度、圃場整備事業実施計画に御所地区、約2haが予定された。御所地区は昭和28年、山梨大学により発掘調査された「原の前遺跡」（山梨大学学芸学部研究報告 第5号「下津金出土の顔面把手—小林和生」）と、津金小学校をはさんで同じ台地に辺り、附近の畠には土器片の散布もみられ、埋蔵文化財包蔵地であることが予見された。そこで御所地区圃場整備計画地内の遺跡の範囲と形状を確認するために、昭和56年5月25日～6月7日にかけて、山下孝司、渡辺儀訓両氏により試掘調査が実施された。

その結果、遺跡は調査地域のはば全域にわたって遺存していることが判り、時代も縄文時代を中心に平安時代、中世にまたがる複合遺跡であることも確認された。

今回の本調査実施対象地区は、先の試掘調査の成果をもとに工事計画上、遺構が削平消滅する地区に限り、その他現況は削平しても遺構面に達しない地区は除外した。その結果、約2500haと限られた範囲で本調査を実施することとなった。

II 遺跡の立地と環境

津金御所前遺跡は、須玉町下津金字御所前に位置し、須玉川とその支流の波竈川とにはさまれた相の原台地にある。相の原台地は、標高約750m～800mで、南北約2km、東西約750m～500mの細長い逆三角をした南向きの緩かな傾斜をもつ台地である。須玉川との比高は約70m～100mを数え、この深い谷によって西の八ヶ岳南麓の広大な地域と一線を画し、北や東は、比高200m～300mの山々がとり囲み、周辺とは完全に独立した地域を形成している。

山梨県遺跡地名表には、周辺の遺跡として相の原遺跡、原の前遺跡、西原遺跡が記載されているが、昭和56年御所前遺跡の発掘調査を担当した当教育委員会は、昭和61年までに次の遺跡の調査を終了している。

桑原遺跡　須玉町上津金　縄文時代後期の住居址2軒と夥しい数の黒曜石の無刃、有刃石鏽と、彫刻文に朱を施した耳栓や大小滑車型耳栓が検出された。（第1図3）

御所前遺跡第2次調査　縄文時代前期住居址1軒、中期住居址8軒、平安時代の焼失住居1軒が検出された。出土遺物として多数の深鉢と浅鉢、埋がめ等が出土した。（第1図2）

桑原南遺跡　桑原遺跡の南に位置する緩傾地。縄文時代後期住居址2軒、平安時代住居址10軒、巨大な土壙1、掘立柱建物址数軒を検出。（第1図4）

原の前遺跡　須玉町下津金字原之前　縄文時代前期から中期にかけての住居址20軒、平安時代後半の住居址1、縄文時代の土壙数基、時期不明の土壙数基を検出。（第1図5）

御屋敷遺跡　須玉町下津金字御屋敷　縄文時代前期の住居址2軒、平安時代住居址2軒。出土遺物は、織維土器片と土師質土器片、陶磁器片が出土した。

御屋敷西遺跡 住居址4軒と平安時代住居址1軒、2間×2間の掘立柱建物址1棟のほか、ピット群2が検出され、遺物は小振りの石劍、完型に近い小型深鉢、土師質土器、陶磁片が出土した。

川又遺跡 須玉町穴平 繩文時代早期から前期にかけての土器、後期から晩期及び晩期末から弥生時代中期にかけての土器多量を発見。遺構は敷石住居跡1軒、近世の地境と思われる石列、集石数基、壇棺葬1が発見された。

川又南遺跡 繩文時代住居址7軒、平安時代の焼失住居1軒のほか3軒と埋甕群2ヶ所の遺構と、繩文時代前期から中期にかけての土器多数が発見された。

西川遺跡 須玉町穴平の中村地区 遺構は繩文時代中期の住居址1軒、平安時代住居址17軒、中世の堅穴造構4、中世の石凹堅穴造構1、同時代と思われる土壙5、平安時代と思われる方形堅穴造構1、炭化物が堆積した土壙2、焼土造構6、L字状溝造構1のほか、掘立柱建物址（軒数現在調査中）である。遺物は、繩文時代中期の深鉢、埋甕、多数の土器片と石器、平安時代の完型环と土師質坏片、薄手の土師質土器片、カメ片等である。

このほか、地元の方々の話から調査区域対象外に多数の遺構の存在を窺い知ることができる。西は須玉川の流れにより、北と東を山に囲まれて完全に独立した津金の地は、繩文時代から平安時代を経て、中世にまでその歴史の痕跡を残している。既ち、戦国時代辺境武士團として小尾衆、武川衆と並んで、津金衆の名を四圍にとどろかせた人々のふる里でもある。今も残る古宮屋敷は、津金衆の屋敷跡で、御所と呼ばれ、土塁と堀の一部を認めることができる。

III 調査の実施

1. 発掘区の設定と調査方法（第2図）

発掘区を現況にあわせてA区、B区、C区、D区とした。A区=3073番地、B区=3072番地、C区=3058—1番地、D区=3062、3066、3069番地の各一部である。

2. 調査方法

a. 調査区全域を重機により遺構確認まで排土し、その後、人力により遺構の平面プランを確認する。住居址ナンバーは試掘調査時に2号住居址まで確認されたので、3号住居址からナンバーを発見順につけた。

b. 各区の状況により、必要に応じてグリッドなどを設定した。既ち、A区では土壙群Aと3号住居址、7号住居址を含む2mグリッドを6m×10mで設定し、同じく土壙群Bを6m×10mとした。この他に土壙群Bより東の遺物包含層を黒色帯とした。C区では全面に亘り2mグリッドを20m×20mの区域内に設定した。

c. 住居址の調査は、プランを確認した時点で任意にベルトを十字に残し、四分割して覆土中の遺物を回収した。一括遺物、土器片の大きいもの、主な石器などは遺物図に記載した。

d. 土壌はA区に関しては発掘時、特にナンバーをつけなかった。

3. 調査経過

9月11、12日 A区とB区を重機による耕作土、床土の排上作業を行う。

- 9月15日 本調査開始、3号住居址を確認、床及び炉址を検出。北巨摩で初の曾利1式住居址を発見。
- 9月16日 4号、5号住居址プラン確認。
- 9月17日 石製勾玉の未完成品発見。町長、教育長及び町議会議員全員の視察を受ける。
- 9月19日 重機による排土を並行する。
- 9月21日 琥珀玉発見。
- 9月24日 C区に2グリッドを設け調査開始。文化財審議委員見学。
- 9月30日 4、5、6号住居址ほぼ完掘。
- 10月5日 3号住居址より水炎形把手付深鉢と人面形把手付土器発見。
- 10月6日 4、5、6号住居址遺物回収完了。
- 10月8日 土壌群に2mグリッドを設ける。
- 10月10日 造構実測。
- 10月12日 調査完了。

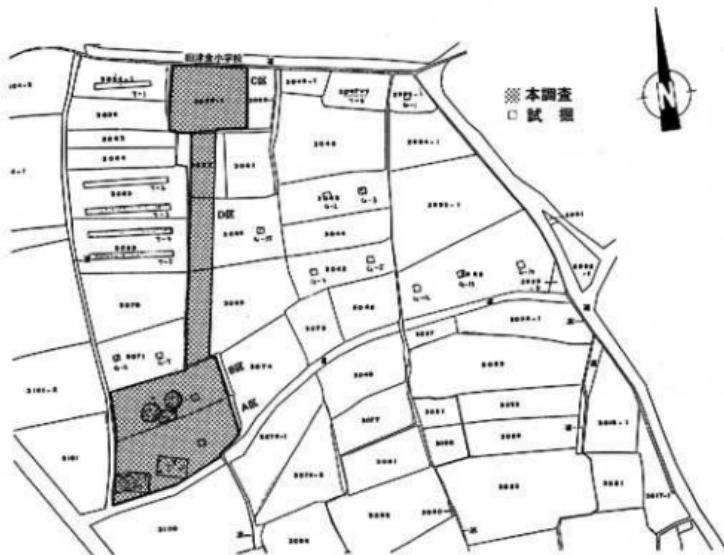
IV 遺構

遺跡の概要

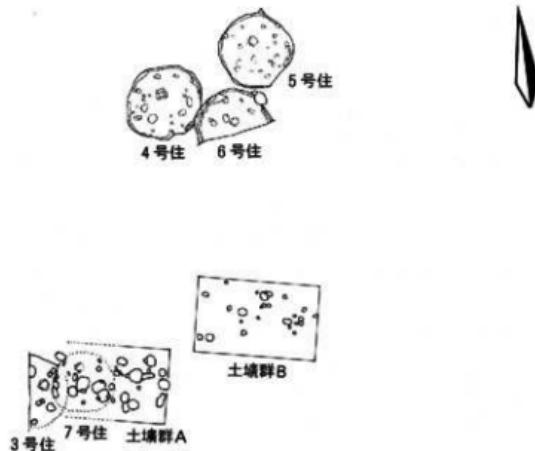
津金御所前遺跡は、相の原台地に立地し、標高約750mから800mを測る。現況は水田及びトマト、林檎、栗の木畑である。調査区域は、相の原台地中央を南北に縦走する村道が「く」の字状に曲折する地点にあり、3号住居址が村道によって切られていた。遺跡の基本土層は、第1層耕作土、第2層褐色土の水田床土、第3層がやゝ黒褐色がかった褐色土で遺物包含層でもある。第4層は黄褐色土である。造構は柱穴からプランを推定した住居址1と、はっきりしたプランを持つ住居址4軒のほか、土壌群2が検出された。出土遺物は、水炎形大把手付深鉢、顔面把手付深鉢、人面付深鉢、浅鉢、磨製石斧、打製石斧、石匙、石鐵、石製勾玉、琥珀玉等が出土している。

すべて縄文時代中期初頭から後葉にかけての住居址と土壌からなりA区とB区に集中する。

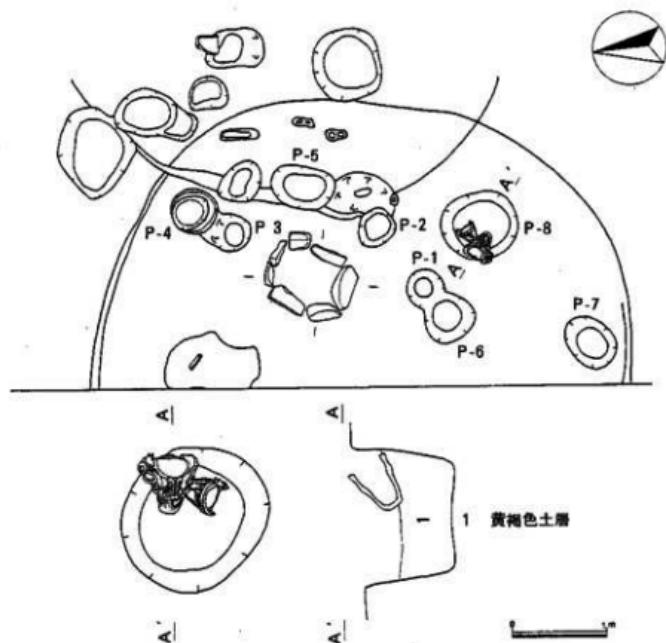
1. 住居址



第2図 津金御所前遺跡全体図 1/2000



第3図 遺構配図図 1/500

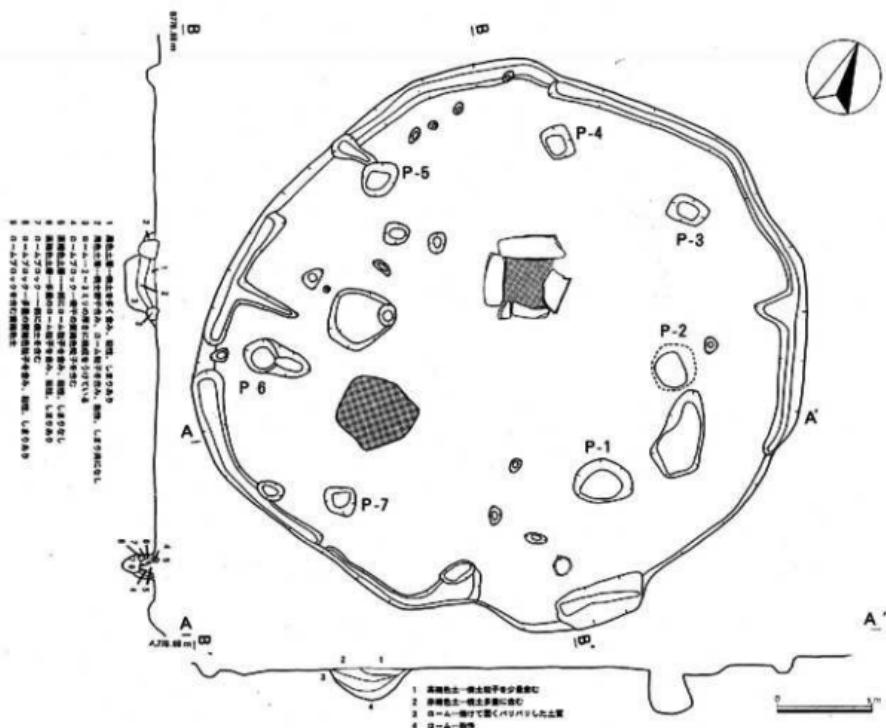


第4図 3号住居址平面図

1) 3号住居址(第4図、第9図1・2)

この住居址は曾利1期といわれる縄文時代中期後葉の初めに属するもので、山梨県八ヶ岳南麓より初めて発見された住居であるばかりでなく、出土遺物も、水炎形大把手付深鉢や人面形把手付深鉢など、この時代の最高水準をゆく遺物を出土し、本県内外から注目を集めている。調査区の南西に位置し、用地の関係から半分しか調査が出来なかった。掘り込みは浅く、検出面から床面まで約10cmであった。壁は北側でわずかに立ち上りが見られる外、南で一部確認出来ただけであった。石囲い炉周辺の床面は良好だったが、壁付近になるとはっきりしない。

石囲い炉は100cm×79cmの長方形で河原石と平石を用いている。地床炉は一部検出しただけで、他は調査区外で全容は判らないが、不整円形を呈すると思われる。周溝は東側に継続して見られる。柱穴は7本と思われ、P-1からP-3が主柱穴で、P-4からP-6は拡張時の主柱穴かと考えられる。P-8に関しては水炎形把手付深鉢などが出土していることから、単なる柱穴とは思われない。



第5図 4号住居址平面図

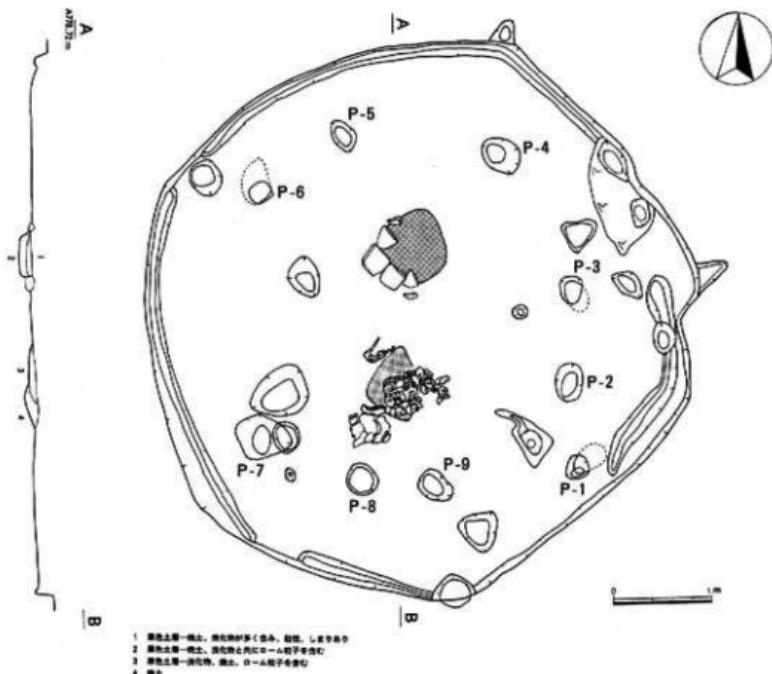
2) 4号住居址(第5図)

5m45cm×6m50cmの東西がやや長い円形プランで、南面が少し張り出している。掘り込みは浅く、検出面から床面まで10cm前後であったが、遺存状態は良好であった。

柱穴と思われるものは24本あり、その内、主柱穴はP-1からP-7の7本と思われる。

周溝は北西部を除き全周するが、南の入口部と思われる部分は攪乱のため、その有無が判らない。壁は南壁を除いて立ち上りがはっきりしている。床は埋めめ付近を除いて良好であった。炉は石囲い炉と地床炉がある。石囲い炉は平石を用い、90cm×80cmの方形のもので、焼土の堆積は余り見られず、ブロック状のものが炉石上に散布していた。地床炉は長径90cm、短径80cmの不整5角形を呈し、焼土層も厚く地山のロームもかなり焼けており、石囲い炉より実用されていたと思われる。

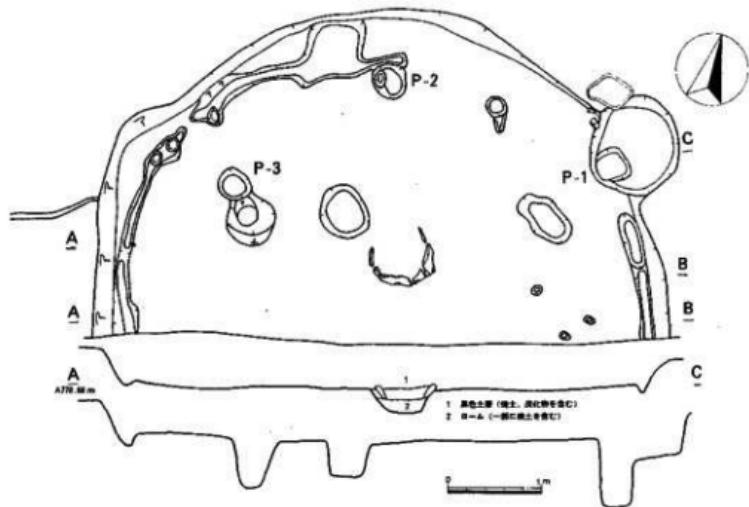
南に埋めめがあり、この付近が入口部と考えられ、埋めめと石囲い炉を結ぶ線上に八ヶ岳連峰の赤岳山頂があるのは、何らかの儀礼があったのではないかと推察される。



第6図 5号住居址平面図

3) 5号住居址(第6図、第9図3)

南北6m、東西5m70cmのはば円形のプランで、掘り込みは浅く確認面より10cmから15cmであった。しかし遺構の遺存状態は良好であった。柱穴は22本あり、その内で主柱穴はP-1からP-9と思われる。又、北と南にそれぞれP-10、P-11のようにプランから稍々はみ出したものも見られる。周溝は南東及び東の一部で検出できなかったが、断続的ではあるが全周する。壁は南東の一部を除き良好な立ち上りが見られる。床は中央部ほどしまりがあり、壁際で稍々軟弱な所もあるが全体に良好であった。炉は石囲い炉と地床炉を確認した。石囲い炉は平石を用いた方形のものと思われるが、炉石の半分以上が消失している。また炉石のない部分に長方形の黒褐色をした浅い掘り込みが見られ、炉の中央の凹石を中心に放射線上に並ぶ。地床炉は不整方形で焼土も割合に厚い。



第7図 6号住居址平面図

4) 6号住居址(第7図)

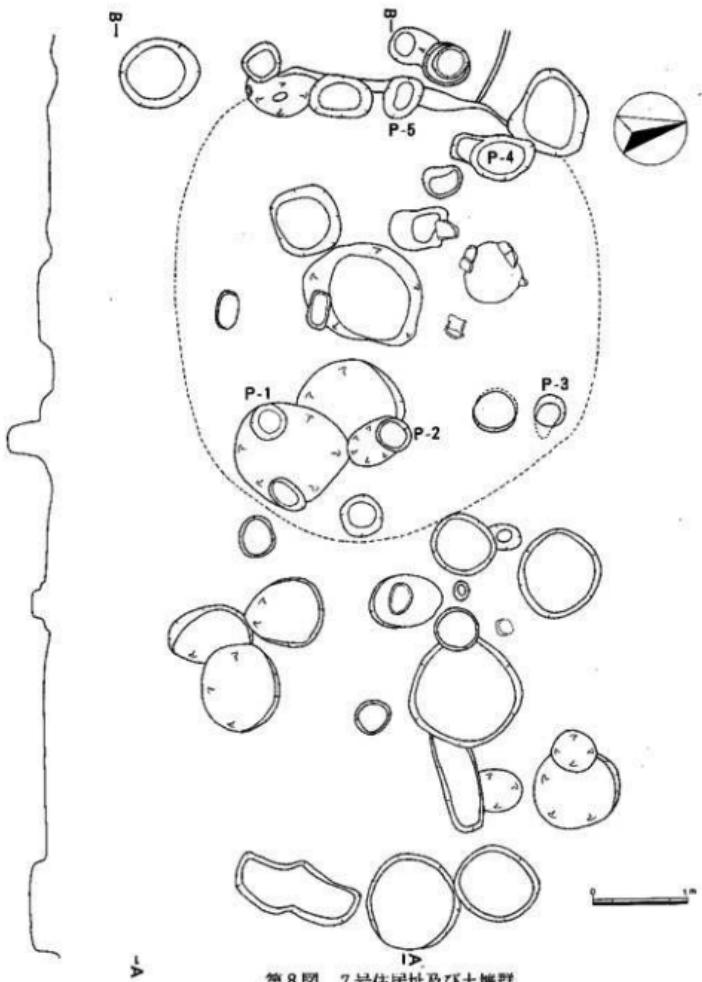
住居址の南半分が開墾によって削平されている。現存するプランは $6\text{ m} \times 3\text{ m}50\text{ cm}$ を測り、原形は円形のプランと考えられる。又、北東の一部は土壤によって切られている。柱穴は11本あり、その内、主柱穴はP-1からP-3と思われる。掘り込みはこの遺跡内で一番深く、40cmから50cmあった。周溝は北の一部を除き検出された。壁は全体に良好であったが、東の4号住と接するあたりは一部が崩落していた。床面は良好で、炉は石囲い炉があり、河原石を用いた不整円形のものである。

5) 7号住居址(第8図)

土壤や搅乱により、はっきりとしたプランの確認は出来なかった。壁は北西の一部にわずかに立ち上りが見られ、西壁は3号住に切られているようであった。柱穴と思われるものは8本あり、主柱穴はP-1からP-5と思われ、プランは柱穴によって推定した。床は部分的に見られるが余り良好なものではなかった。炉は石囲い炉が検出されたが、まわりの炉石が抜かれていた。

2. 土 塙(第8図)

群をなすものが2ヶ所あって、これをAとBに分けた。平面でプランを確認できる状態ではなかったため、グリッド($2\text{ m} \times 2\text{ m}$)で掘り下げた。土壤は次のような幾つかの型にわけら



第8図 7号住居址及び土壌群

れる。

- A) 大型で円形、底があり鉢状を呈するもの
 - B) 大型で円形、底が立ち上がるるもの
 - C) B) の小型のもの
 - D) 細長い形状をもつもの
 - E) 平面プランは円形で、内部が袋状を呈するもの
- などが見られる。

V 遺 物

1. 土 器

縄文時代中期の土器が殆どであった。

a) 3号住居址

北巨摩地方で始めて、曾利1式に比定される一括遺物が検出された。特に横臥状に出土した水炎形大把手付深鉢は当時を代表する遺物であり、これと重なる状態で、口縁に2つの人面を配した深鉢も出土している。これは縄文時代中期の人面付深鉢として最終のものであろう。他にも把手付深鉢が出土し、いずれも実測が可能である。この他、復元及び実測が可能なものは10数個体あり、深鉢や小形深鉢が主な器形である。

b) 4号住居址

井戸尻期の遺物が主に出土し、埋がめはより古いタイプに属する。縄文を地文にもつものが多く見られ、器形は深鉢が主で小形のものも見られ、復元及び実測可能なものは10個体前後である。

c) 5号住居址

4号住居址からの出土遺物より稍々新しい井戸尻II式に属するもので、注目される大型の顔面把手付深鉢の出土状況は、石窯炉の南にある地床が直上に圧倒破壊していた。遺物の多くは石窯炉の西側と地床周辺に集中して出土し、器形は深鉢が主であるが、無文の浅鉢と思われるものもある。

d) 6号住居址

一括土器はが址上部に少し浮いた地点より出土し、井戸尻II期のやゝ古いタイプと思われる。器形は深鉢と鉢が主であり、器台が完形で出土した。

e) 7号住居址、土壤群A、Bと黒色帶

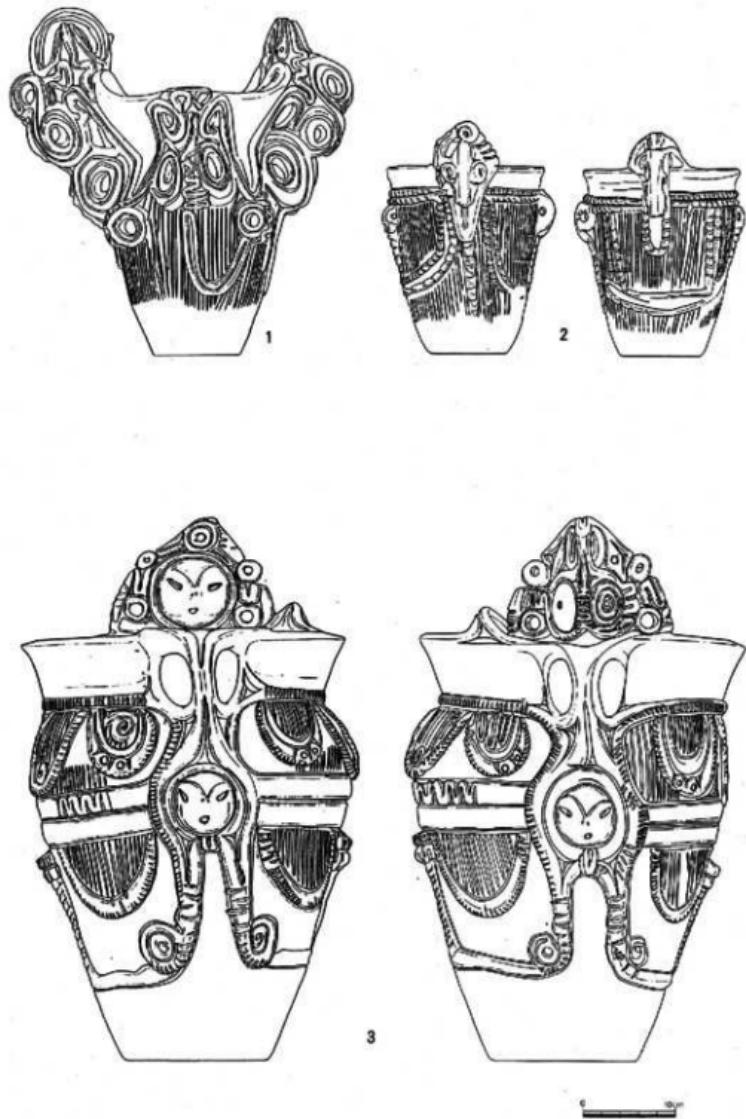
未整理であるが、中期初頭の貉沢と新道期のものが多く見られ、復元及び実測可能なものが多数ある。

2. 石 器

打製石斧を中心に磨製石斧、石鎌、石匙（スクレイバー）、砥石などが出土した。この他、出土した未加工の石や片剝などは、すべて人為的に持ちこまれたものとして、凡て回収した。

各住居址から出土した石器は次の通りである。

- (イ) 3号住居址 打製石斧1、石匙1、石鎌1、砥石1、その他剥片石器、凹石各1
- (ロ) 4号住居址 磨製石斧2、打製石斧5、凹石1、その他1
- (ハ) 5号住居址 打製石斧10、磨製石斧1、凹石1、撚り石2
- (ニ) 6号住居址 打製石斧12、石鎌1、丸石1
- (ホ) 7号住居址及び土壤群 打製石斧を主に石器多数出土



第9図 遺物実測図

VI ま と め

本遺跡の特徴は、中期初頭から後葉にかけての集落地であり、この時期の集落址がまとまって発掘されたのは山梨県下で数少ない貴重な遺跡であると共に、北巨摩地方では初めてのものである。御所前遺跡の調査は、集落のごく一部を発見したにとどまったが、第二次の御所前遺跡の発掘調査で縄文時代早期の住居址 1軒と縄文時代中期住居址 8軒と平安時代の焼失住居 1が検出された。更に旧津金小学校北の原の前遺跡からは、縄文時代早期から中期の住居址が20軒発見されたことは、当時の集落が更に相の原の西（圃場整備事業区域外の平坦な畠地）へ続くと考察される。又、時期の違う住居址間に重複が少なく、出土土器に煮炊き用深鉢が多く、5号、6号住居址から農耕工具として使用された多数の打製石斧が検出されたこと等々から、立地する相の原台地が狩漁採集を生活基盤とする縄文人にとって、沃野豊壤で暮しやすく、長期的生活の営みが行われた微証であらう。

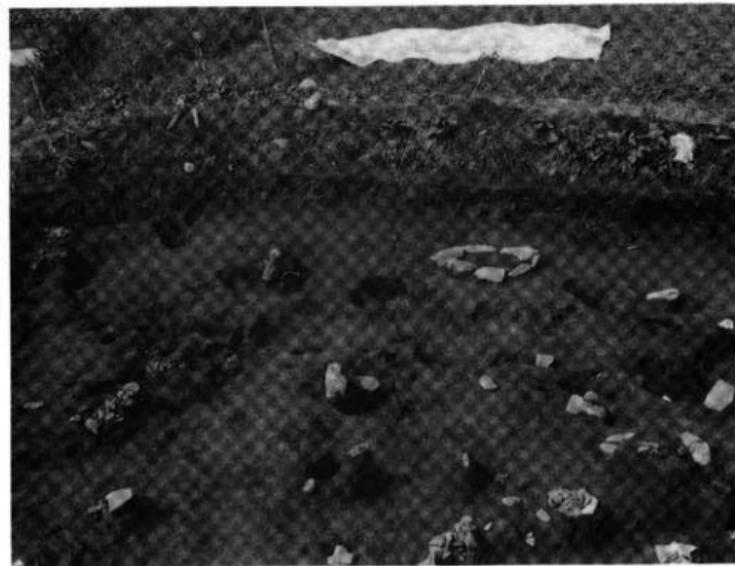
大渦文把手付深鉢と顔面把手付深鉢の 写真撮影並びに出版物掲載と展示内容

- 1) 昭和57年5月 株式会社 小学館刊行「名宝日本の美術」第一巻原史美術(顔面)
- 2) 昭和57年12月 朝日新聞社 アサヒグラフ特集(顔面)
- 3) 昭和58年2月 山梨日日新聞社「山梨の遺跡」(顔面と大渦文)
- 4) 昭和58年4月 山梨日日新聞社「山梨の考古学」(大渦文)
- 5) 昭和58年10月 山梨県立考古博物館 第一回特別展土偶に展示(顔面)
- 6) 昭和60年3月 株式会社 小学館「縄文土器の文様」…仮題…(顔面)
- 7) 昭和60年10月 東京国立博物館 特別展「日本の陶磁」展示、目録に所収(大渦文)
- 8) 昭和60年11月 市立岡谷美術考古館「おかやのあけぼのと縄文土器、弥生土器と土偶、埴輪にみる先史芸術の美」に展示(顔面)
- 9) 昭和60年12月 中央公論社「日本の古代」第二巻「列島の地域文化」カバー装幀(顔面)
- 10) 昭和61年2月 株式会社 集英社「日本の古代史」第三巻5月刊行(顔面)
- 11) 昭和61年7月 株式会社 オフィス ュー 東独 EDITION LEPZIG 社
出版 Die Frau in Japan 『日本の女性』(大渦文と顔面)
- 12) 昭和61年10月 朝日新聞社出版局事典編集室 週刊朝日百科「日本の歴史」36・37号
(顔面)
- 13) 昭和61年11月 日本放送協会 NHK教養番組62年春総合テレビ放映予定
大型企画番組「日本 その心とかたち」撮影(顔面)
- 14) 昭和62年4月 株式会社 小学館刊行「縄文土器大観」第二巻中期I(顔面)

図 版



作業風景（3号住居址付近）



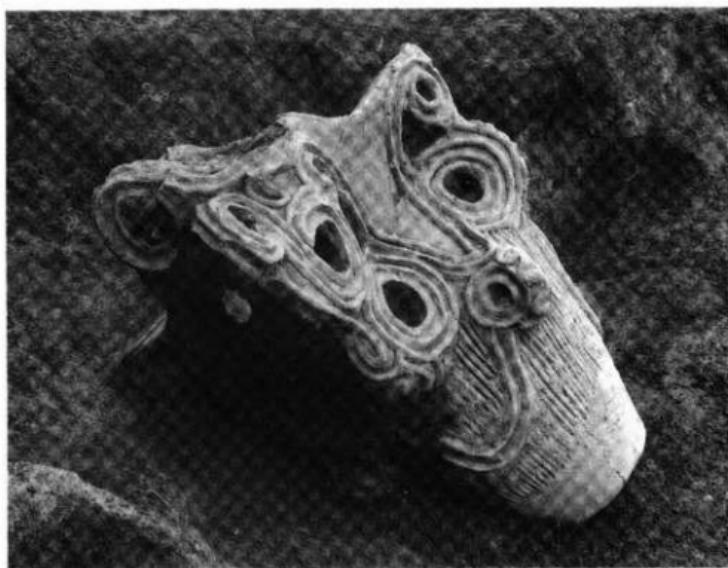
3号住居址



3号住居址水炎形土器及び人面形把手付深鉢出土状況



同上



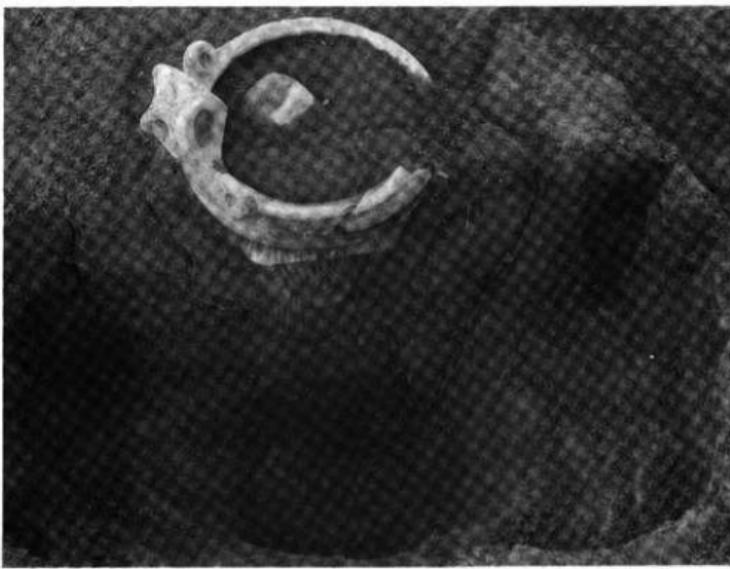
水炎形土器



人面形把手付深鉢



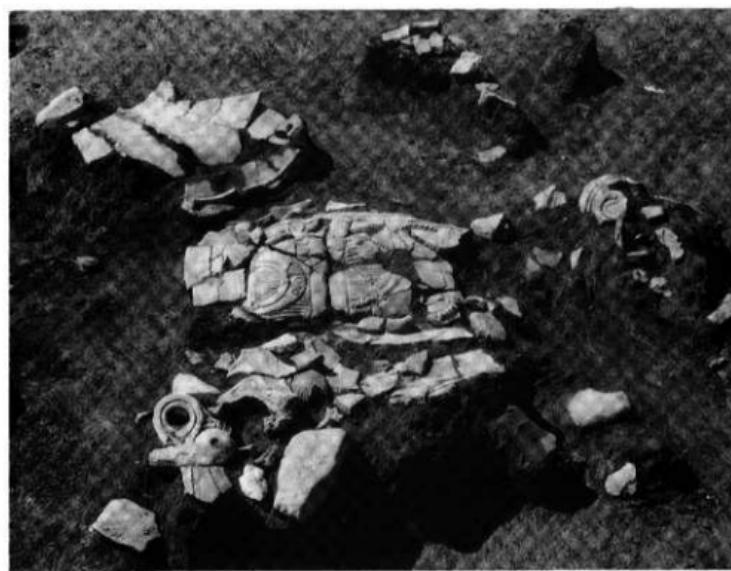
4号住居址遺物出土状況及び6号住居址（手前）



4号住居址埋がめ出土状況



5号住居址遺物出土状況



5号住居址顔面把手付深鉢（出塵文土器）出土状況



水炎形土器（左、長野県富士見町曾利遺跡出土 右、津金御所前遺跡出土）



発掘調査 参加者

須玉町埋蔵文化財報告 第4集
昭和61年3月25日 印刷
昭和61年3月31日 発行

津金御所前遺跡

発行所 須玉町教育委員会
印刷所 緑北印刷株

